

《履修上の留意事項》Google Classroomから課題の提示などを行うので、パソコンとwi-fi環境を整えておくことが望ましい。

《担当者名》 前田秀彦 葛西聡子 才川悦子

【概要】

小児聴覚障害に対する言語聴覚療法を行うために必要なことから、理論面から学習する。本講では小児聴覚障害の評価、聴覚補償機器（補聴器・人工内耳）、（リ）ハビリテーションを学ぶ。「聴覚障害学演習」への基礎を作る。

【学修目標】

「一般目標」

1. 小児聴覚障害の診断・治療に必要な検査法、評価法について理解する。
2. 補聴器・人工内耳などの聴覚補償機器について理解し説明できる。
3. 小児聴覚障害の（リ）ハビリテーション（補聴と聴能言語指導）について概説できる。
4. 小児聴覚障害に対する社会福祉制度について理解し説明できる。

「行動目標」

1. 症例に対して診断に必要な聴覚検査法を挙げ説明できる。
2. 自覚的聴力検査法と他覚的聴力検査法を分類し、その違いを説明できる。
3. 補聴器と人工内耳の違いを理解し説明できる。
4. 小児聴覚障害に対する（リ）ハビリテーションについて理解し説明できる。
5. 聴覚障害に対する社会福祉制度について理解し説明できる。
6. 視覚聴覚二重障害について理解し、その支援についての概要について理解する。
7. 遺伝子による難聴の概要について理解する。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1) 2	オリエンテーション 乳幼児聴覚検査法1、2	授業の目標と全体の流れを把握する。 聴性行動反応検査（BOA）、条件詮索反応検査（COR）の原理、方法を学ぶ。 ピープショウテスト、遊戯聴力検査の原理、方法を学ぶ。また、乳幼児聴覚検査を概観し、小児聴覚検査の全体像を把握する。	前田秀彦
3) 4	乳幼児聴覚検査法3、4 （他覚的聴力検査）	聴性脳幹反応（ABR）の実際を学ぶ。 聴性定常反応（ASSR）の実際を学ぶ。 新生児聴覚スクリーニングの概要について学ぶ。	前田秀彦
5) 6	聴覚補償1、2 （小児の補聴1、2）	補聴器の構造、機能についての知識の確認をする。 小児聴覚障害における補聴器の選択、調整、装用の評価法について学ぶ。	前田秀彦
7) 8	聴覚補償3、4 （人工内耳、人工中耳）	聴覚補償のための人工臓器である、人工内耳、人工中耳についての概要、理論、適応条件などについて学ぶ。	才川悦子
9) 10	（リ）ハビリテーション1、2 （人工内耳の実際1、2）	人工内耳のマッピングと評価法について学ぶ。 人工内耳のハビリテーションについて学ぶ。	葛西聡子
11) 12	（リ）ハビリテーション3、4 （聴覚と発達1、2）	小児聴覚障害のハビリテーションの概要を学び、指導機関と指導方法について理解する。また、乳幼児期の聴覚活用について学ぶ。	葛西聡子
13) 14	（リ）ハビリテーション5、6 （聴覚と発達3、4）	発達段階に沿った聴覚障害児の支援について具体的に学ぶ。 小児聴覚障害における言語発達の評価と訓練の立案について学ぶ。	葛西聡子
15	視覚聴覚二重障害	視覚聴覚二重障害の概要を学ぶ。盲ろう者のコミュニケーション手段について学ぶ。	前田秀彦

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

定期試験100%

【教科書】

中村公枝 他 編 「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第2版」 医学書院 2015年

日本聴覚医学会 編 「聴覚検査の実際 改訂4版」 南山堂 2017年

【参考書】

青木直史 著 「ゼロからはじめる音響学」 講談社 2014年

立石恒雄 他 編 「言語聴覚士のための子どもの聴覚障害訓練ガイド」 医学書院 2004年

宇佐美 真一 著・編 「きこえと遺伝子(改訂第2版): 難聴の遺伝子診断とその社会的貢献」 金原出版 2015年

小寺一興 著 「補聴器フィッティングの考え方」 診断と治療社 2010年

小川郁 編集 「よくわかる聴覚障害 難聴と耳鳴りのすべて」 永井書店 2010年

【学修の準備】

- ・聴覚検査法、聴覚補償機器等の内容は2年次で履修した「聴覚障害学」、3年次に履修する「聴覚障害学演習」にリンクする。指定した教科書および参考書にあげた専門書を読み、評価法、補聴、聴覚障害の病態、診断・治療などについて総合的に理解するようこころがけること。分からない部分は、オフィスアワーを利用し積極的に担当教員に確認すること。
- ・履修した「音響学」を復習すること。分からない部分は、オフィスアワーを利用し積極的に担当教員に確認すること。参考書などを利用して理解しておくこと。
- ・講義終了後は、配布した資料や指定した教科書、参考書を精読し重要部分を復習して理解しておくこと。毎回授業の最初に前回の授業内容に関する小テストを実施するので、復習しておくこと。講義終了後は、配布した資料や指定した教科書、参考書を精読し重要部分を復習して理解しておくこと。講義以外に、最低、160分（予習80分、復習80分）の学習時間を確保するのが望ましい。専門用語等を理解した上で、次の講義に備えること。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP3）言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

前田秀彦（臨床検査技師、言語聴覚士）

葛西聡子（言語聴覚士）

才川悦子（医師）

【実務経験を活かした教育内容】

豊富な臨床経験をもとに、理論はもちろん臨床に基づいた実践的な講義を展開する。